



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@oki-zamami.jp



●つなぐ手は決まっている

ーワモンダコの交接ー

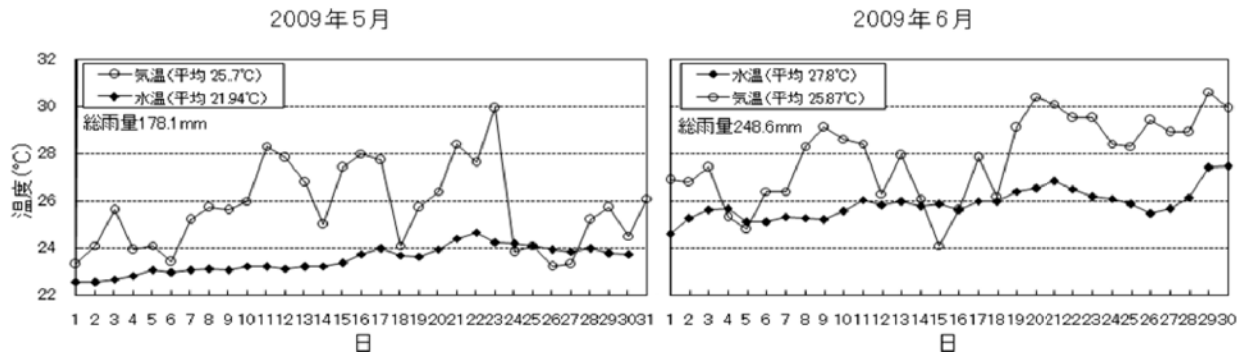
みなさんもお存じのとおり、この時期はサンゴの産卵の季節です。研究所では、いつもどおり満月前後にマジノハマで産卵調査をおこなっています。夜な夜な潜っていると、繁殖^{はんしよく}しているのはサンゴだけではなく、ほかのたくさんの動物たちも卵や精子を出したり、繁殖相手を探したりしているのがわかります。いつもは海底でドテッと寝そべっているジャノメナマコも体を持ち上げて精子を出していますし、タツナミガイは縦に連なって交接しています。そういえば、赤色の幅の広いリボンを丸めたようなミカドウミウシの卵塊^{らんかい}も岩の上でよく目にします。また、以前にご紹介したようにオカヤドカリが幼生を放ちに海にやって来るのもこの時期ですし（アムスルだより No. 14、75）、サンゴガニの仲間がサンゴの縁に出てきて、それまでおなかに抱えて育ててきた幼生を水中に放っているのも目にします。さて、そうしたなか今年もワモ

ンダコ^{こうせつ}の交接の様子を見ることができたので、今回はその話をしましょう。

ワモンダコは、慶良間をはじめサンゴ礁の海でふつうに見られる大型のタコです。腕の付け根に輪の形の模様があるのが特徴なのですが（だから「輪紋^{わもん}だこ」という名前）、はっきりしない場合も少なくなく、腕に白い斑紋^{はんもん}が並んでいることでほかの種類と区別することが多いです。食用になり、みなさんが捕って食べている大きなタコの多くはこの種類だと思います。

7月4日の夜のことでした。暗い海に潜っているとライトの光の中に柔らかな影が現れました。全長 60cm ぐらいのワモンダコです。光にびっくりしたのか、サンゴの上でじっと立ち止まっています。照らすのもかわいそうなので、さっとライトを違う方向にむけて泳ぎ去ろうとしたのですが、こんなに人の近くで全身を表に出してじっとしているタコなどあまり見たことがなく、ちょっと妙な感じがしたので、もう一度だけちゃんと見てみよう^{つか}と光を向けてみると、そのタコの 2m ほどとなりにもう 1 匹のタコがいたのでした。どうやら最初の個体がメスで、あとの個体がオスのようです。しばらく見ていると、オスが近づこうとすると、メスはちょっと逃げていきます。そして、5 分くらい追いかけてこをしたころ、オスの伸ばした 1 本の腕がメスを

定点観測



で、2匹はその腕でつながった形で移動し始めました（冒頭の写真）。メスがけっこう強い力で引っばるように動くのですが、よほどしっかり捕まえているのか、その腕がはなれることはなく、20分くらいそのまま移動しているうちに岩かげにかくれてしまいました。これが、観察したタコの交接らしい場面です。先ほどオスがメスを「捕まえて」と書きましたが、その腕はメスに巻きつけられているわけではなく、腕の先端がメスの体の背側のすき間（ろうとという管の出ている付近）から中に入り込んでるだけで、外からはどうしてそれで離れないのか、よくわかりません。けれど、この1本の腕が、タコの繁殖にはとても重要なのです。

この腕は、「^{こうせつわん}交接腕」と呼ばれています。タコの仲間は、オスが精子のつまったカプセル（^{せいきょう}精莢といいます）を交接腕でメスの体内に運ぶことで交接がおこなわれるのです。交接腕は、他の7本の腕と形が違っていて、先端に吸盤がなかったり、腕に沿ってついている膜状の部分が溝のような形をしていたりします。そして、どの腕が交接腕かは種類によって決まっていて、ワモンダコの属しているマダコ属の場合は、右の第3腕が交接腕です（わかりにくいですが、タコはろうとの側が背、目の側が腹です。腹の方を1番にして腕の番号がついていますから、目のある面の右側の3番目の腕が交接腕ということになります）。

交接の後、どうなるのでしょうか。ワモンダコのメスは、15万～70万個もの卵を産み、それがふ化するまでの20～30日間、メスは卵を守りながら暮らすそうです。形も泳ぎ方も、とてもユニークなタコたちですが、繁殖の仕方も、やっぱりちょっと変わっているようです。

● 阿嘉島の海より

6月9日、阿嘉小学校、慶留間小中学校合同のサンゴ産卵観察会が行われました。阿嘉小学校は今年で5年目、慶留間小中学校は初めての観察会でした。今年は5月下旬になっても水温がなかなか上がらず心配していたのですが、無事産卵してくれました。ただ、このような水温が影響したのか、今年は当日の産卵の有無を見極めるのがとても難しく、8日の夕方に今晚は産卵しないだろうと判断した後にサンゴが産卵し始めてしまいました。観察会用のサンゴの多くも実はこの晩に産卵してしまったのでした。でもすべてのサンゴが産卵してしまったわけではないことがわかり、翌日のチャンスにけることができたのです。長年サンゴの産卵を見てきいても判断を誤ることもあります。それが自然なのでしょう。

写真提供 読売新聞社

